

# 竜ヶ鼻に立つ

● 竜ヶ鼻 ● 梵字曼荼羅 ● 大杉 ● 石鎚山

貴重な植生と密教の聖地、キーワードは巨岩。竜ヶ鼻と岩屋権現に足を踏み入れた。



→写真右から岩肌が見える突起した部分が竜ヶ鼻と呼ばれる場所。入り口の石積みに登るとのろし台があり、竜ヶ鼻の先端部分に出る。ここは絶壁で、落ちたらひとたまりもないので、決して一人では行かないように。このような石灰岩と花こう岩が交わる一接交代鉱床に「スカルン鉱物」ができています。↑竜ヶ鼻の巨岩と、そこからの眺望。

## 特異な石灰岩地

林道を進み伊方へと向かう、目指すは竜ヶ鼻。石灰岩特有のこの地は、長い間、風雨に浸された岩石がいくつも露出して、文字どおり竜の鼻先を連想させる断崖となっている。ここには天正年間の狼煙台があったとされ、入り口に人の手によって組まれたと思われる5メートルほどの石組みがある。敵方の攻撃に備えたこの狼煙台は、香春岳城への連絡に用いられたと伝えられている。

前のページで触れたように、福智山は花崗岩が土台となっており、この竜ヶ鼻は一変して石灰岩地となっている。このような花崗岩と石灰岩が接触する所は、結晶や鉱物ができやすい環境にあるという。また植生についても絶滅危惧種のイワンシデなど、貴重な群落がみられ、ここ一体は、開発や樹木の伐採などを制限した第一種特別地域に指定されている。竜ヶ鼻は、外敵を防ぎやすいことから、香春岳に生息するサルの休息所にもなっているという。巨岩に腰掛け、すばらしい眺めを楽しみながらのんびりするサルたちを思うと、少しうらやましく感じた。



↑ごくわずかな水分で生息する石灰岩地にしか生えないイワンシデ。竜ヶ鼻に群落があり、幹が分かれた大ぶりなものもある。

↑竜ヶ鼻先端部分からの眺め。真下は伊方の広谷地区。



## 謎めく岩屋権現

石段を進み、橋を渡ると、目の前に見上げるほどの岩壁がそびえる。弁城にある岩屋権現。その大岩の一角に、梵字曼荼羅が刻まれている。梵字とは仏教とともに日本に伝わってきたインドの文字を総称したもの。ここでは不動明王や阿弥陀如来など、一文字ずつ神仏が表されているという。県内では最古の梵字で、健武2年（1335年）に法橋良密によって刻まれたとされている。鎌倉時代の英彦山山伏の窟入り修験を物語る資料



↑石橋の向こうの正面が岩屋権現の岩壁、右側に梵字と大杉がある。  
→県指定文化財の梵字曼荼羅、正式名は「方城岩屋権現梵字曼荼羅」。  
↑天然記念物、岩屋権現の大スギ。樹勢はよく、今も成長している。  
↓岩屋権現横の壁面に口を開ける鍾乳洞、ここから奥深く伸びている。



で、天然の岩盤に年号とともに刻まれた貴重なものとして、県の文化財に指定されている。

その岩盤の向かい側にあるスギの木は樹高36.2メートル、根元周囲6.6メートルの巨木。日本古来のスギは、九州本土に人の植栽によるものしかないと言われているが、この大スギは実生の可能性があり、県の天然記念物に指定されている。そのほかにも岩屋権現には鍾乳洞が存在するなど、謎めいた部分を秘めながら密教の聖地としての雰囲気を感じさせている。



四国の石鎚山から分神霊場として開場された石鎚山大権現。うっそうとした杉林の中に石仏が転々と座し、巨岩や奇岩が目立つ。



↑林道には評判の湧水がある。遠方からくみに来る人も多い。

## かつて鉱山がありました

竜ヶ鼻の付近には江戸時代からの末広鉱山や畑銅山があり、末広鉱山は昭和の初期まで鉱業が営まれていました。わたしも実際に坑内に入ったことがあります。この竜ヶ鼻を含めて、福智山一帯は自然と文化の宝庫であり、町にとつての貴重な財産です。景観や植生をくずさないように広くアビールして、大切な観光資源として活用し、たくさんの方が訪れる町になればいいと思っています。



インタビュー 高津勝春さん伊方